

「くらい（ぐらい）」の分布と意味の構文論的考察

Study of the Distribution and Meaning of “kurai (gurai)” in sentence constructions

朱 武平
ZHU Wuping

要旨 「くらい（ぐらい）」には、意味的に、おおよその数量や程度をあらわす「見積り」、また、「コーヒーぐらいなら」といった「評価」の意味を示す用法がある。しかし、意味はランダムに分化するものではなく、さまざまな構文環境によって作り出されるものであると考える。「くらい（ぐらい）」が文中のどの位置に現われるか、どんな品詞と結びつくか、どんな述語と関係するかは、文法現象として表面的な差ではなく、両者の意味的特徴に大きく影響を示していると考ええる。本稿では、副助辞／とりたて助辞といわれてきた「くらい（ぐらい）」をとりあげ、実例に依拠して考察をおこない、「くらい（ぐらい）」の本質的な機能を解明することを試みる¹⁾。

0. はじめに

「くらい（ぐらい）」は名詞「くらい（位）」から転じたものとされる。助辞として使われるのは近世以後で、倉持（1969）は「比較の対象となるものを例示的にあげて、程度を表わすのが、その本来の用法とみられる」（p 516）と説明している。

- (1) ああ、コーヒーぐらいなら、遠慮はいらないよ。（コーヒーメーカー）
- (2) 初犯なら罪も軽く、罰金五万円くらいで、保釈金は、百万までだろうといったそうだった。（さきに愛ありて）

「くらい（ぐらい）」について、沼田（1986）は「自者が主張において述語や文の示す事柄に対し肯定されるギリギリの境界に位置するもの」（p 211）と解釈し、例(1)の「くらい（ぐらい）」を「下限」をあらわす「とりたて詞」とし、例(2)の「くらい（ぐらい）」（「見積もり」）を形式名詞として「とりたて詞」から除外する。仁田（1981）は「ばかり」に関して「数量をある幅の中で概括的に捉えた『見積もり』の取り立て」としていることから、例(2)の「5万円くらい」も、おおよそ「5万円」という意味で捉えられ、「見積もり」を示す意味と考えられる²⁾。

本稿では「くらい（ぐらい）」の構文的特徴を中心に記述をおこない、形式と意味の対応を含め「くらい（ぐらい）」の構文的特徴をあきらかにしたい。

1. 「くらい（ぐらい）」の構文的特徴

1.1. 「くらい（ぐらい）」の前にくる要素

「くらい（ぐらい）」の前に立つ要素は、名詞（名詞句）、名詞の格形式（「に」のみ）、副詞、引用句節などがある。他の助辞との相互承接において、「くらい（ぐらい）」は概して後接しにくく、また、動詞連用形「～て形」などのあとにもあらわれることがないよう

である。

1.1.1. 名詞（名詞句）に後接

名詞に「くらい（ぐらい）」が直接つく場合、数や量、あるいは順序をあらわす数量名詞の割合が大きく、前接名詞全体の75%を占め、意味的に「見積もり（概数）」をあらわす。普通名詞（ひと名詞）などに後接する場合には、「評価」の意味を示すことが多い³⁾。

- (3) 民主的な講演会が開催された。聴衆が二百人くらい集った。(石中先生)
- (4) もう少し開いて、中を覗き込む。——六畳ぐらいの部屋に、布団が敷きっ放しになっている。(女社長)
- (5) 「ケチな男だな。僕だったら、それほどいい思いをしていて、それほどのろけをいった以上、この勘定ぐらい払うよ」。(停年退職)
- (6) 「看病くらいする気になったらどう」、「看病なら、霧子さんのほうがうまいでしょ。(さきに愛ありて)

形式名詞「こと」、「もの」などに後接するとき、「そんな」「こんな」の連体詞が「ことくらい」の前に立つことが多く、「評価」の意味をあらわす場合が多い⁴⁾。

- (7) 手相なんてでたらめに決っているだ。あんなものを信ずるなんて、馬鹿々々しい。そりゃ姉やおらの氣質を言い当てはしたが、若い女として当然のことにすぎない。そんなことぐらい誰だって当てられる……。 (石中先生)
- (8) 弱虫め、と彼は叫びたかった。そんなことぐらいで何で自分の道を無理にへし曲げなければならないのだ。何故もっと真っ直ぐに強くなっては行けなかった……。 (食卓のない家)

「月とすっぽん」のような慣用的な表現に後接して、程度の開きの意味をあらわす。このような副詞的に使われるとき、「くらい（ぐらい）」は省略できない。

- (9) わるいめぐりあわせで道ならぬことをするのと、承知の上でするのは、月とすっぽんくらい違うと言ってやって出てきたんだからね。(さきに愛ありて)

疑問詞に後接する。「いくら」「どれ」「何年」「何回」に限られており、「いつ」「だれ」には前接しないようである。

- (10) 「いくらぐらい引かれる?」「君の場合なら十万円ぐらいだろうな」。(停年退職)
- (11) 何年くらい前なのかしら。(死者の奢り)
- (12) どれぐらい金が必要なのかね?(氾濫)

1.1.2. 名詞の格形式に後接

「だけ」や「ばかり」は、名詞の格形式に後接するものが多いが、「くらい（ぐらい）」は格助辞「に」にしか後接しない。なお、このときは例(13)のように、「評価」の意味になる。例(14)は格形式というより、「遊びに」でひとまとまりと見たほうが妥当かもしれない。w

1.1.2.1 格助辞「に」に後接

- (13) しかし、弁護人にぐらい、まともに話をしてくれなければ困る。(花埋み)
 - (14) それや、たまには熊谷に遊びにくらいは来るでしょうけど、そんな所で遊んだといってたってしています。(湿原)
- 他の格助辞には後接しないが、引用の「と」につき、あとの述語の発言や思考などの内

容をあらわす用法がある。引用の「と」について、鈴木（1972）は「このくつつきは、おそらくなまをしめす「と」とは発生がことなるもの（あるいはふるく分化したもの）と考えられ、現在では別の形（同音形式、ホモニム）とみとめるべきかともおもわれる」（p 214）と指摘する。引用内容を示す「と」は動詞・形容詞・述語名詞などにもつくので、格助辞「と」ではないことがわかる⁵⁾。

(15) 他の執筆者の分担した論文はもうみんな校了になりましたとくらい言うさ。(死の島)

(16) きっと有望な事業でも発見したか、或いはその会社を買い取るために、狂奔しているのではなかろうか、とぐらいに彼は考えていたのだった。(女の警察)

例(17)の終助辞「よ」に後接する形であらわれることがあるが、引用句節と見たほうが妥当であろう。

(17) 一応、いやよぐらいのことは言ってみせるさ。(山本五十六)

1.1.3. 副詞に後接

少量をあらわす程度副詞「ちょっと」や「すこし」などに後接することがあるが、「たくさん」「かなり」「だいぶ」などのような大量をあらわす副詞に付加することはない。

(18) 少しぐらい困ることがあったほうが、おたがいの身のためです。(石中先生)

(19) ちょっとぐらい遅れるかもわからない。(停年退職)

(20) 思わず信之は踏み込もうとした足をひいた。壺湯は思ったより広くはない。二人で入るのがいっぱいぐらいであろう。(食卓のない家)

例(20)の副詞「いっぱい」は、「いっぱい食べる」といった「たくさん」の意味ではなく、「限度ぎりぎりまで」といった程度の意味をあらわす用法である。

陳述副詞には後接しないようである。例(21)は、「やっと会えたね」「やっとショックから立ち直った」といったような陳述副詞の用法ではなく、「飲める程度がせいぜい一本」という意味をあらわしているのである。

(21) お酒は、日本酒なら一合、ビールなら一本やっとくらいのところで (おさん)

1.1.4. 連用形⁶⁾

「くらい（ぐらい）」は動詞連体形、形容詞連体形、述語名詞「だ（で）」に後接するが、連用形には後接しない。例(22)(23)の場合に見る「～おき」は「おく」の連用形ではなく、「おく」が接辞化したものであると思われる。かならず「～おきくらい（ぐらい）に」の形で用いられる。

(22) 注意して見たんですが、一日おきか二日おきぐらいに供え物がしてある。(石中先生)

(23) 十分おきぐらいにジーンとモーターのまわる音がした。(氾濫)

また、例(24)の「～なりぐらい」の「～なり」は補助動詞「なる」の連用形ではなく、断定や指定の「なり」でコピュラの「だ」とおなじ用法であると考えられる。

(24) 文学が好きだったし、文学すなわち恋愛なりぐらいに心得ておって、ずいぶん無理をして、女学生の友達や恋人をつくったりしていたけど (石中先生)

なお、例(35)の「怪しからん」のように、固定化された形で前接する場合があるが、もとは「ケシクアラン」なので「怪しくあるだろう」の意味であろう。

(25) 夫婦に表彰状を出さないのが、怪しからんぐらいのものだよ！ (石中先生)

1.1.5. 並列詞

「か」などに後接して、同じ資格の名詞（句）の並べ立てで用いられる。

- (26) 聞えるか聞えないかくらいのぼそぼそした声で、藍子と周二の箸の持ちようを叱ったりした。（楡家の人々）
- (27) ひとりがやと通れるか通れないかくらいの細い道だったが、長い年月にわたって踏みこまれた道である証拠に、道はさながら笹やぶの中の溝のように、山肌深くきざみこまれていた。（孤高の人）
- (28) 乞食をするか、物取りになるかくらいの道しか残されていない。（漁火）

1.2. 「くらい（ぐらい）」のあとにくる要素

格助辞、係助辞（とくに「は」）、終助辞、接続詞などが後接する。その他の副助辞は前後ともにつきににくい。

1.2.1. 格助辞が後接

格助辞が後接する用例が非常に多く、数量名詞はいうまでもなく、普通名詞も「見積もり（程度）」をあらわすものが多い。もともと「くらい（ぐらい）」は名詞「くらい（位）」が助辞化したもので、その名詞的性格が強く残っているといえよう。

1.2.1.1. 格助辞「が」が後接

- (29) 本当はチャーハンにギョーザぐらいが良かったのだが、こういう所ではきっと普通の中華ソバ屋はないだろう。（女社長）
 - (30) 連れて来たって、子供の世話ぐらいが関の山ですよ。（真知子）
- ただ、「くらい（ぐらい）」が名詞的性格をもっているといっても、下の例のように「連体形+「くらい（ぐらい）」の形で名詞句を形成し、それに格助辞がついて補語となったり、「の格」がついて連体修飾となったりすることを見ると、名詞としての独立性はなく、「形式名詞」に近いであろう。
- (31) 退屈なせいもあって、親切に応対するくらいが、なさねばならぬ仕事で、あとはまるきり暇になってしまった。（さきに愛ありて）
 - (32) 食うわけには行かないから、まあ乞食をするくらいが落ちでしょうが（真知子）
 - (33) 校長先生、電灯をひくぐらいのお金は出してもらえらるうと思いますが、いかがですか。（人間の壁）

1.2.1.2. 格助辞「を」が後接

格助辞「を」が後接する。「くらい（ぐらい）を」の前に立つのは名詞のみで、例(31)「応対するくらいが」のように、「連体形+くらい（ぐらい）+が」の用法があるが、「を」に付加するとき、このような用法は見られなかった。

- (34) その一晩だけで種一は給料の半分ぐらいを稼いでしまったのである。（新橋烏森口青春篇）
- (35) また私立大学ならば、助教授の席ぐらいを容易に手に入れられるだろう。（氾濫）
- (36) 以前から私は内藤にレコードを貸してくれるよう頼んでいた。七〇年前後のレコードで、内藤がいいと思う十枚ぐらいを選んでくれないか、という希望つきだった。（一瞬の夏）

1.2.1.3. 格助辞「に」が後接

格助辞「に」に付加した場合、「くらい（ぐらい）」の前に立つ名詞（句）は、意味上、時間「二時」「花咲爺さん（程度）」のように、「見積もり」の意味しか持たず、「評価」をあらわさない。格助辞「に」は前後とも接続可能であるが、グラフ1で示されたように、「に」が前にくることは少なく、「評価」の意味しかあらわさない。

(37) 時子はたいてい真夜中の二時くらいに、柏木にある四階建てのマンションへ帰る。
(さきに愛ありて)

(38) うちの先生を花咲爺さんくらいに思ってるからね。(さきに愛ありて)

例(39)の「～するくらいに」、例(40)「異常なくらいに」のような用法では、動詞や形容詞連体形が前に立ち、程度をあらわしている。また、例(46)(41)? は名詞述語の用法である。そのいずれも「くらい（ぐらい）」を取り去ると、文として成立できなくなるので、「くらい（ぐらい）」の名詞的な一面が現われたものであろう。

(39) 顔をしている芝居を漸くやめて、人違いするくらいに、にこにこした童顔を見せた。
(帰郷)

(40) 歌う男の顔は白い。いや、異常なくらいに白すぎる。(放課後のロックンロール・パーティ)

(41) はじめは誰もが、いずれ秘密の男女関係だろうくらいに想像していた。(砂の女)

「くらい（ぐらい）に」+係助辞「は」の用法がある。「くらい（ぐらい）には」の前に立つものは、名詞（数量名詞）や句節に限られ、連体形の形式を持たなくなる⁷⁾。「は」が「連体形」を受けないことによって、その前接の副助辞にも影響を及ぼすことが示される。また、「は」が後接することによって、「評価」の意味合いが付加される。

(42) 木皮を煮つめてかためただけのもので、利尿ぐらいにはきくであろう。(国盗り物語)

(43) 僕だってバアぐらいには行きますよ。(死の島)

例(44)(45)「くらい（ぐらい）に」+「しか」の形で使われる場合、「見積もり（程度）」の意味になる。

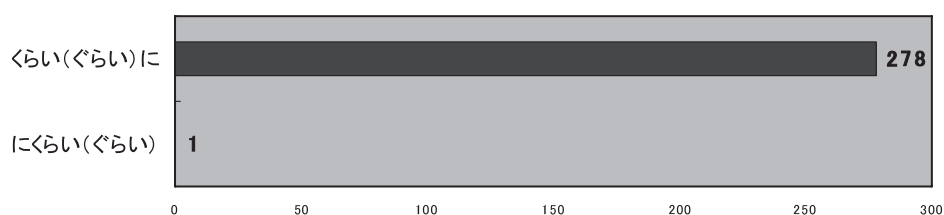
(44) 警戒警報などは慣れっこで、以前の正午のサイレンぐらいにしか思わなくなっていた。(黒い雨)

(45) 思いのほか、年も若い。三十二、三ぐらいにしか見えない。(夜明け)

1.2.1.4. 格助辞「へ」が後接

「ぐらい（ぐらい）へ」の用法は、「が」や「に」に比べて用例が極端に少なく、不自然に感じるかもしれない。

(46) たぶん最初は急所急所の結び目十カ所くらいへ、チョイチョイ刃物を入れて置き、潮時を見て、川へ乗出した一番端っこの、大事な縄を二三カ所きったのでしょー——



グラフ1 「に」格への付加

四十何人と乗っているんだから、これは一とたまりありませんや。(鬼の面)

1.2.1.5. 格助辞「と」が後接

格助辞「と」が後接する場合、ほとんどが引用句「～と思う」、「～という」の形であるが、例(47)(48)は「なかま格」としての格助辞の用法から離れ、引用句節などの内容を示す「と」に近い。

(47) 交通事故の死亡者数なら、年間一万人前後ですから、いわゆる怪死は、交通事故で亡くなる人の十分の一ぐらいと仮定して、年間千人としておきますか——まったくのあてずっぽうですが」。(対州風聞書)

(48) 彼女は自分のところから何かを持って来て、この病室を少しでも美しく見せようなどという気はさらになかった。それはM子の入院期間がほんの一週間ぐらいと初めから極められていたせいではなく、もともと彼女には、装飾とか清潔とか整頓とかいったことに、少しも関心がなかったからだ。(死の島)

また、例(49)のような「と」は格助辞の「と」ではなく、並列詞である。

(49) 主人の妹らしい三十くらいと二十余りの女が来合わしていたりして、広くもない座に多勢の人間がいる。(霜凍る宵)

1.2.1.6. 格助辞「で」が後接

「くらい(ぐらい)」のあとに「で」がつく用法のうち、ほとんどが、コピュラ「だ」の中止形(で)が「くらい(ぐらい)」のあとにつく用法で、例(50)～(52)のような格助辞の用法は少なかった⁸⁾。

(50) 防火用水にはる厚い氷を割ることが、どこの家でも日課の一つとなっていた。夜に警報が鳴ると慌てて熱湯をかけたりしたが、薬罐一杯の湯くらいで溶けきる水ではなかった。(楡家の人々)

(51) うまく行きそうよ。千三百万円くらいで何とかなると思うの。半金だけ先に払って下されば、あとの半分は二、三カ月先でもいいらしいわよ。(射程)

(52) 納豆の粒が醤油に浮くぐらいにして、御飯にぶっかけて食うと、十粒ぐらいで一杯の御飯が食べられますよ。(石中先生)

例(52)の「浮くぐらい」は、動詞連体形「浮く」に後接し、「浮くぐらい」全体がひとまとまりの名詞を形成し、「に」格の前に立つ用法である。

1.2.1.7. 格助辞「から」が後接

格助辞「から」が後接して「くらい(ぐらい)から」になる場合、その前に立つ要素は名詞のみで、連体形や引用の句節などには後接しない。この制約によって、「ぐらい」は「見積もり」の意味になる。

(53) 下宿生は夕方六時ぐらいから九時までの間、随時ここで食事をするのだ。(自転車の夏)

(54) 四六〇万円で新車があり、中古で一五〇万円くらいからあった。(冬の旅)

1.2.1.8. 格助辞「まで」が後接

格助辞「まで」が後接することがある。「そのぐらい」や「これぐらい」がまえにくると「評価」の意味と取れる場合もあるが、ほとんどが「見積もり」の意味を示しているようである。

(55) 計算では十月くらいまで食べていかれるはずだったんだ。(一瞬の夏)

- (56) そして、軍部と同等くらいに飛行機については内情に通じていると自負している峻一は、今や急速に欧米に追いつきつつある日本の軍用機が、その頃までにはどのくらいまで進歩し発達しているものか、その頃の敵軍の状態はどうであろうかと、しばし危懼と期待とが相半ばする専門家的な長々しい感慨にふけり、のどかな太平楽なその細長い顔をじっと天井に向けた。（楡家の人々）

1.2.2. 連体格の接続

連体格の「の格」と「までの格」が後接する。

1.2.2.1. 「くらい（ぐらい）の」⁹⁾

「くらい（ぐらい）」＋の

- (57) どこかに六畳一間くらいの小さなアパートでも借り、そこで、週末に子供達の遊びに来るのを待っていたり、病院にいる長男を見舞ってやったりすれば、どんなによかったろうにと思ったのだった。（太郎物語）

1.2.2.2. 「くらい（ぐらい）までの」

- (58) 道の左右には白いコンクリートの七階から十階くらいまでのビルジグが立ちつづいている……。 （食卓のない家）
- (59) それを書いてる私の頭の中には、いつも、五、六歳から十歳くらいまでの麻理が、浮んでいた。（娘と私）

1.2.3. 副助辞・係助辞が後接

係助辞は「は・も・しか・でも・まで」が後接するが、「くらい（ぐらい）」のあとに副助辞はつかないようである。

1.2.3.1. 係助辞が後接

係助辞といわれる「は」や「も」などは概して後接のみで、「くらい（ぐらい）」の前に現われることはない。また、係助辞があとにつくことによって、たとえば「は・も」の場合、意味的にも「評価」に限られるなどの制限が見られる。

1.2.3.1.1. 「は」が後接

助辞「は」が後接する。「は」がつくと、意味上「評価」となることが多い。

- (60) 便所の掃除はともかくとして、お買い物くらいはご主人にさせるかもしれないという気もするのであった。（われらが風狂の師）
- (61) ドアの開け方ぐらいは知っている。（下駄の上の卵）

1.2.3.1.2. 「も」が後接

助辞「も」が「くらい（ぐらい）」に後接する場合、「くらい（ぐらい）」の意味に「評価」の意味が付加される。

- (62) 「わたしも、その論文、半年ほどまえに図書館で読みました——円盤形ではなくて、タンカーくらいもある楕円形で、マッハ四ほどで飛び、Vターンしたそうですね。Uターンなら人類でもできるかもしれないけれど、マッハ四のVターンは人間には無理ですね——UFOの存在を信じるようになったのも、その記事を読んだせいです」。（対州風聞書）

- (63) 「君がやるという訳じゃない。……とにかくそういう訳で、先生という職業は、これでなかなか悪くないんだ。ただ悪いのは月給が安いことだ。いつまで働いても残るものが無い。そこで、物持ちの家に婿にはいるというのが案外に条件がいいんだ。田地が三町歩か四町歩もあって、家屋敷があって、そこにきれいな娘さんがいて、それがそっくり自分のものになる。そうして悠々と先生をしながら、二十五年くらいも勤めていれば校長になれる。退職金も多くなる。世間の人望もあって、教育者として尊敬されて、こんないい人生はありませんよ」。(人間の壁)

1.2.3.1.3. 「しか」が後接

助辞「しか」が後接する場合、「くらい(ぐらい)」の前に名詞(指示詞)、副詞(ちょっと)などの要素が現われる。「しか」が後接すると「くらい(ぐらい)」の意味は「見積もり」となる。

- (64) 私たちの町は耕作に依存するばかりで、絹や玉や機械などというような特殊な技術はなにももたないから、城壁ぐらいしか自慢できるものはないのだが、これもほかの町のとくらべてとくにこれといった特徴をあげることはできない。(パニック)
- (65) 今はもう、心残りのないように闘ってほしいと祈ることぐらいしかできないのかもしれない。(一瞬の夏)
- (66) 太郎は、二十人ちょっとぐらいしか見物人のいない、寒々とした映画館のかなり端の方を選んで坐った。(太郎物語)

「くらい(ぐらい)+しか」の前に連体格の「の」がくる場合がある。例(67)「けしごむのくらい」がひとまとまりの「名詞(句)」を形成し、そのあとに「しか」がつづく用法である。用例は少ないが、意味的に「見積もり(程度)」と考えるのが妥当であろう。

- (67) すると戸のすきまからはいつて来たのは一ぴきの野ねずみでした。そして大へんちいさなこどもをつれてちょろちょろとゴーシュの前へ歩いてきました。そのまた野ねずみのこどもときたらまるでけしごむのぐらいしかないのでゴーシュはおもわずわらいました。すると野ねずみは何をわらわれたろうというようにきょろきょろしながらゴーシュの前に来て、青い栗の実を一つぶ前においてちゃんとおじぎをして云いました。(セロ弾きのゴーシュ)

1.2.3.1.4. 「でも」が後接

「でも」が後接する場合、かならず「見積もり」の意味になる。ただし、例(69)は、「三つぐらいでも」を、「であつても」というコピュラ「だ」の譲歩形と考えることもでき、助辞「でも」の多様性が示唆される。

- (68) これを要するに、私は戦時下の私のうちの献立表を一週間分ぐらいでも書くつもりでいましたが、毎日繰返していた台所仕事ですから、却って雑然として正確なことが思い浮かんで参りません。(黒い雨)
- (69) 田舎の子供は早くから野放しだから、三つぐらいでもかなりの遠道をして平気でいるが(生活の探求)

1.2.3.1.5. 「まで」が後接

「評価」をあらわす「まで」が後接しうるのは「くらい(ぐらい)まで」の前の要素が普通名詞(数量や程度をあらわす名詞を除く)の場合に限られているようである。ただ、これも格助辞「まで」の用法とはっきりした境界がないため、判断は難しい¹⁰⁾。

- (70) 町の発明家と称する男を連れて来て、海軍省で実験をやらせてみると言い張る。どうやら又、航空本部の大西滝治郎あたりに焚きつけられたことらしく、大西さんの話も、人相見ぐらいまでは結構だが、水から油が取れては只事ではなくなって来ると、副官連中はみな渋い顔をしていた。（山本五十六）

例(71)のように、疑問詞がつく場合、格助辞の「まで」であることがわかる。

- (71) 今や急速に欧米に追いつきつつある日本の軍用機が、その頃までにはどのくらいまで進歩し発達しているものか、その頃の敵軍の状態はどうであろうかと、しばし危懼と期待とが相半ばする専門家的な長々しい感慨にふけり、のどかな太平楽なその細長い顔をじっと天井に向けた。（楡家の人々）

「くらい（ぐらい）まで」のあと、さらに「しか」がつく用法が見られる。係助辞のなかでも係助辞らしい、つまり「係性」が高いものほどうしろにつく傾向がある。たとえば、「副助辞くらい+まで+しか」の場合、「しか」は「まで」のあとに来るが、決して前に現われることがない。そこから、「しか」のほうの「係性」がより強いと考える。例(72)(73)の「膝まで」「肩まで」は、例(70)の「人相見まで」より格らしさが強いと言ってよいであろう。

- (72) 青年が、びっくりしたような顔をして奥へ引返そうとしたとき、見るからに人の好さそうな、顔じゅう皺でうずまった丈の高い老人が、やっと膝くらいまでしかないエプロンのような仕事着のはしで、手をふきながらとびだしてきた。（人生劇場）
- (73) 猫背の、異様に背の高い男で吟子はせいぜいその肩くらいまでしかない。三人は吟子がこの道を通るのを知って待ち伏せていたのである。（花埋み）

1.3. 文末モダリティ

文末には過去・完了、あるいは意志・願望などが見られた。

- (74) 何か熱心にやったことがあれば、そのことぐらいだ。（永遠なる序章）
- (75) そこは駅から歩いて五分ぐらいだった。（汜濫）
- (76) 立命で何人くらいだろう。二〇〇人くらいかな。（二十歳の原点）
- (77) あの時、赤ちゃんは生後半年くらいだったかしら。（死児を育てる）

しかし、「連体形+くらい（ぐらい）+だ（非過去・過去）」では、述語に「だろう（かしら）」などの推量が用いられない。

- (78) それに月岡弁護士は新聞記者が大好きなんだ。わたしと一緒に食事をしてるのを撮れなんて注文をつけるくらいだもの。（湿原）
- (79) 暑いさなかを歩きまわって一層頭の調子がおかしくなって入院したぐらいだった。（死の島）

「～あれば」「だったら」の假定形が後接するが、「～くらい（ぐらい）あれば」の前にくる要素は「これ」「それ」の指示詞のみで、「～くらい（ぐらい）だったら」の前は連体形に限る。

- (80) 二人が畑の中を歩いて、多分、あれでもない、これでもないタイ語で話しながら、鼻で臭いをかぎ、探しまわっていたのが、適当な香味料となる野菜だった。ショウガ、ニンニク、パセリ、セロリ、トマト、「まーこれくらいあればいいか」というような顔をして、鼻唄を歌いながら台所に向かっていた二人を想い出す。（みみず物語）

(81) 恋人に逢うくらいだったら、死んだほうが良いと思いました。(おしゃれ童子)

(82) 「だって、復興祭っていうくらいだったら……おめでたいんじゃないの」。(放課後のロックンロール・パーティ)

逆接の「～なのに」があとにつくことがある。逆説の「～くらい(ぐらい)なのに」の前にくるのは連体形のみで、その他の要素は見られない。

(83) 当人の口からそういつてるくらいなのに、それをそんな……。 (葦手)

(84) 鮎太は、この時の山浦の顔を男性的だと思った。身長は自分より小さいくらいなのに、どこにあの豪胆さと、敏捷さと、不逞さが匿されているのかと思った。(あすなろ物語)

原因・理由の「～だから」が後接する場合がある。「～くらい(ぐらい)だから」の前に名詞が立つと「見積もり」の意味をあらわし、連体形が立つと「評価」をあらわすといった制限があるようである。

(85) 遠い昔、地球上の人口は千万人ぐらいで、長い間にわたって増減が少なかったと推測されている。母体をそこなわないよう妊娠、出産ができるのは十八歳くらいだから四年に一人なら母親が三十歳になるまでに子どもは三人。「人生五十年」だと親が死ぬ頃は三人目も一人前になる。(人間の基本)

(86) そこへ嫁入りして、亭主にあきたらなくて、離婚したくらいだから、相当の者だよ。(さきに愛ありて)

2. まとめ

以上、「くらい(ぐらい)」の構文的特徴について言語資料から調査し、考察した。その結果を以下のようにまとめた。

- ・名詞に直接つく場合、前に立つ要素は数や量、あるいは程度をあらわす数量名詞の割合が大きく、前接名詞全体の75%を占め、意味的に「見積もり(概数)」をあらわす。普通名詞(ひとと名詞)などに後接する場合には、「評価」の意味を示すことが多い。
- ・名詞(句)、名詞の格形式、副詞などの要素に後接可能であることがわかった。格形式との前後接において、「NK__」及び「N__K」形式の両方を持ち、形式に対応して意味の違いが生じることがわかった。「N__K」形式では、すべての格助辞が後接可能であり、「見積り」の意味を示す。「NK__」形式では、前接可能なのは「に」のみで、「評価」の意味に限られる¹¹⁾。
- ・動詞連体形(非過去・過去)、「イ形容詞連体形(非過去・過去)」、「ナ形容詞(非過去のみ)」、引用句節などが前接するが、もともと名詞由来の「くらい(ぐらい)」の働きが強く残っているといえよう。連体形を受けて体言形成する力は強いが、動詞連用形を受けることができない。
- ・係助辞は「こそ・さえ・なんて」を除けば、後接可能であるが、他の副助辞とは前後接ともしにくい。「は」や「も」、「でも」のような係助辞が付加されると、「くらい(ぐらい)」の前接要素が名詞(名詞句)になるといった制限がみられる。

注

- 1) 名詞・動詞・形容詞などの「詞」と区別するため、本論では「助詞」ではなく「助辞」とする。なお本論の中で「副助辞」「係助辞」という用語を使用しているが、「副助詞」「係助詞」とは用語上の違いであって本稿の論に影響を及ぼさない。
- 2) 「見積もり方」は工藤(1977)によって、限定副詞の分類として立てられたものであったが、仁田(1981)は「ダケ、バカリ、グライ」など、数量名詞につく場合は「数量に対する見積もり」として借用している。筆者はこの見方と立場を同じくする。ただし、仁田は「限定」も「概括」も「見積もり」として一括しており、かなり広義に捉えているが、筆者のいう「見積もり」(estimate)は狭義の数量や程度などの「概括」を指すものである。一方、評価の価値づけの基準について、工藤(1997)は、「個人的な予想や期待を基準にした評価もあれば、共同主観的なし社会的に定着した評価、いわゆる評判や定評もある」と指摘している。たとえば「お茶ぐらいは出すよ」のような「くらい（ぐらい）」の意味である。本稿ではこれをひろく「評価」とする。
- 3) 「くらい（ぐらい）」全例 7,296 例のうち、数量名詞が 1,993 例で、全体の 27% を占めている。程度をあらわすものを含む「見積り」の意味をあらわすものが全体の 75% を占める。
- 4) 連体詞「こんな」、「そんな」、「あんな」など不変形容詞は「もの」、「こと」をかざりつけ、それ自体が「評価」の意味を持っており、「こんなことぐらい」がひとつになって「評価」をあらわしているといえよう。
- 5) さしあたってここで格助辞「と」を扱うが、今後検討する必要がある。
- 6) ここで見る「てぐらい」は動詞連用形「～て形」ではなく、「～というぐらい」の用法である。
・いくら学者ぶって見たって、北海道のお兄さんなんかとはあの人まるで違ったちなんだってぐらいは——だのに肝腎の奥さんにそのことが分からないんだから困りものよ。(真知子)
- 7) 「は」は、「くらい（ぐらい）」に付加されたとき、「くらい（ぐらい）」の名詞的働きを制限する傾向が強い。
- 8) 「くらい+で」全例 624 例のうち、「で」格の用法は 38 例しか確認できなかった。
- 9) 「の+くらい（ぐらい）」の場合、「この」「その」「あの」「どの」の指示詞によるものがほとんどであるが、以下のような用法もあるようである。
・教室はたった一つでしたが生徒は三年生がいないだけで、あとは一年から六年までみんなありました。運動場もテニスコートのぐらいでしたが川の岸に小さな学校がありました。(風の又三郎)
- 10) 「くらい（ぐらい）」の前に来る要素が連体形になると、あとにつく「まで」は時間、空間の延長の一点を示す格助辞「まで」ではなく、以下の例で示したように、「評価」の「まで」がついた用法である。
・普段は無口な利朗が内藤と軽口を叩けるぐらいまで親しくなっているということが、私には意外だった。(一瞬の夏)
・疲労を覚えるぐらいまでぶらつき、それからようやくホテルに戻った。(一瞬の夏)
まだ、「くらい（ぐらい）まで」のあと、さらに「は」がつづく場合、後接するのは格助辞の「まで」なのか、「評価」を示す「まで」なのか、その境界が曖昧なため、判断しにくい場合もある。
このことは格助辞「まで」と「評価」の「まで」との連続性を示すものといえる。
・向うは、土地の立地条件を見る前に、ただこらでこんな程度のものが欲しい、あればこれぐらいまでは出してもいい、というだけの話でね。(化石の森)
・「そうなんだけどね、春ぐらいまでは居られるそうだからね」。(さきに愛ありて)
- 11) 「NK __」は、(名詞(句)+格+「くらい（ぐらい）」)を、「N __ K」は、(名詞(句)+「くらい（ぐらい）」+格)を略したものである。

主要参考文献

- (1) 奥津敬一郎・沼田善子・杉本武(1986)『いわゆる日本語助詞の研究』凡人社
- (2) 工藤 浩(1997)「評価成分をめぐる」川端善明・仁田義雄編『日本語文法—体系と方法』ひつじ書房
- (3) 倉持保男(1969)「くらい（ぐらい）——副助詞〈現代語〉」『古典語現代語助詞助動詞詳説』学燈社
- (4) 鈴木重幸(1972)『日本語文法・形態論』むぎ書房
- (5) 高橋太郎(2005)『日本語の文法』ひつじ書房
- (6) 高橋太郎(1978)『研究報告書Ⅰ』国立国語研究所
- (7) 寺村秀夫(1991)『日本語のシンタクスと意味Ⅲ』くろしお出版
- (8) 仁田義雄(1981)「数量に関する取りたて表現をめぐる一系と統合からの文法記述の試み—」

『島田勇雄先生古稀記念ことばの論文集』 明治書院

- (9) 松村明編 (1969) 『古典語現代語助詞助動詞詳説』 松村明編 学燈社
- (10) 宮田幸一 (1948) 『日本語文法の輪郭』 三省堂
- (11) 山田孝雄 (1922) 『日本口語法講義』 宝文館
- (12) 山田孝雄 (1936) 『日本文法学概論』 宝文館

用例引用資料

CD-ROM「新潮文庫 100 冊」

CD-ROM「新潮文庫の絶版 100 冊」

青空文庫